

知的障がい者と卓球 ～親子で拓いたパラリンピックの道～



早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
田中 敏裕

パラリンピックにおいて、現在、知的障がい者の参加が認められている競技は、陸上、水泳、そして卓球の三競技である。パラ卓球は、障がいのタイプや程度に応じて、男女11のクラスに分かれている。身体障がいのパラ卓球競技は、車椅子に座ってプレーするスタイルが5クラス、立ってプレーするスタイルが5クラスあり、障がいの程度が重度の人から軽度の人まで10クラスに分かれて競技に参加することができる。知的障がいのある選手のためのクラスは未だに一つしかなく、世界ランキングの上位者は、軽度の知的障がいを持つ選手たちによって占められている実情がある。今回、東京パラリンピックの卓球競技において、唯一のメダル（銅）を獲得したのが、知的障がい者クラスの伊藤楨紀選手である。伊藤楨紀選手の障がいは軽度よりもやや重い方で、母親の享子さんが常に傍らでサポートして、親子の二人三脚でつかんだパラリンピックのメダルだった。

本稿では、中学生のときに卓球というスポーツの社会に触れて、パラリンピックでメダルをとるまでに至った伊藤楨紀選手と母親の伊藤享子さんの体験に学びながら、知的障がい者のスポーツを通して社会参加とその道程について考えてみたい。なお、筆者は、2017～19年にパラ卓球世界選手権大会等

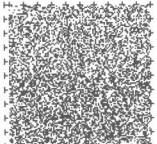
において、知的障がい者卓球の日本代表チームの監督として帯同したことなどから、伊藤選手親子とは親しくしていただいている者である。本稿の内容は、母親の伊藤享子さんと行ったインタビューを中心にまとめたものである。パラスポーツに関心のある人や知的障がいのある子どもを持つ家族にも知ってもらいたいという本人の希望があり、実名で掲載することにご同意をいただいた。伊藤選手の幼年期から成人期までのライフヒストリーをマネージャー役を務めて支え続けてきた母親（伊藤享子さん）自身の言葉（「」の中の文）を通してたどってみたい。

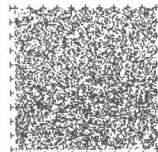
幼少期(小学校まで):

普通の近所づきあい

「(障がいについては)一歳前後ぐらいで思うことはありました。」「ちょっと障がいがあるような気がしますと。でもまあ受け入れてくださったので。お友だちと一緒に幼稚園に通い。それから小学校も学区で、特学ない小学校だったんですけど。みんなにサポートしてもらって、そこを卒業して。」「みなさん、全然ふつうにお付き合いしてくれたので」「マンション内の同学年の子たちとか。あとその近所。そうすると親同士も仲良くなったり。」

幼少の頃は、障がいがあるようだと感じること





はあっても、友だちと一緒に幼稚園に通い、小学校においても普通に近所の同級生とつきあうことできていた。

幼少期の習い事：

最初のスポーツ参加

「幼稚園から小学校6年までスイミングスクール」「最初の2~3ヶ月は大泣きました。」「続いたのは、水泳、公文とお習字。ピアノは、私も根負けしてやめました。」「水泳は6年の引っ越しすぎりぎりまでやってました。お友達と行くじゃないですか。だからそれも楽しみになっていたので」

子どものスポーツ参加に関しては、父親もしくは母親（ときには両親）が重要な役割を果たすことが多い。伊藤選手の場合は、幼稚園の頃から、スポーツ（水泳）を母親が習い事として始めさせている。小学校を卒業するまで水泳を続け、それが友だちづくりにも役立っていたことがわかる。

普通の中学校で部活動：

卓球と出会う

「担任の先生に『あのお母さん、部活どうしようか?』って言われて。」「先生、運動部、きびしいですかね。」って言ったら。『そんなことないんじゃないの。じゃあ。あしたからいろいろ見学させるよ。』と言われて。」「団体競技はコミュニケーションとなるの大変だから、それでいろいろ見てみて、卓球はどうだろう。『じゃあ、卓球にしてみるつ(伊藤選手本人)』っていう感じで」「卓球部の顧問も、できる範囲でやればいいんじゃないですか、ということで」「私、当時、卓球の知識が全然なくつて。障がい者スポーツとかも知らない世界でした。」

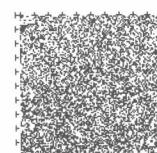
伊藤選手は普通の中学校に入学する。担任から部活動に参加するよう勧めを受けたことをきっかけとして、伊藤選手は卓球と出会うこととなる。自分のペースでできる運動をさせてあげたいという母親の気持ちが、個人競技である卓球を選択する契機となっている。この時点において、卓球という競技も障がい者スポーツも、伊藤選手親子にとっては、まったくの未知の世界だった。

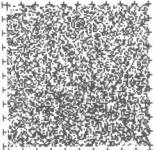
知的障がい者卓球の世界へ：

全国4位そしてアジア大会で準優勝

「中二の5月に第1回のFIDジャパン・チャンピオンシップっていうのが、開催されたんです」「お話しもらって、出ますって言って」「娘はシングルス4位だったんです」「『6位の人までアジア大会にいけます。香港で。』と言われて。こんなこと一生に一回こっきりだろうなって思って、行きますって」「(アジア大会では)決勝戦まで行けて」「もうおばあちゃんも涙流してよろこんでくれたし、もうまわりはすごい。」「本人がいちばん淡々としていましたね。」

ジャパン・パラリンピックに初めて知的障がい者部門ができたのは1997年で、それは伊藤選手が中学校に入学した年である。伊藤選手が中学二年のときに、知的障がい者卓球の第一回ジャパン・チャンピオンシップが開催され、伊藤選手は4位となり、香港で開催されるアジア大会への出場資格を得る。伊藤選手はこのアジア大会において準優勝という好成績をおさめ、家族や関係者は大喜びだった。





高校は特別支援学校： 障がい者としての道

「今まで普通級、普通級で来たんですけど。やっぱり将来を見据えて、ちゃんと障がい者としての道を選ばなきゃいけないと思ったので」「小学校のときには、娘も近所のお友達と遊びに行くこともあるし、お友達がうちにも来る。それはもう毎日のように。」「中学の時だと卓球以外の時だと、あまり周りの友達とコミュニケーションとれてなかったと思うんですよ。」「養護の三年間は、まわりの皆さん障がい持っている方たちで、だからもう好きなようにアピールできる」「だからほんとに養護学校を選択してよかったです。」

中学校まで普通校に通わせていた両親だったが、伊藤選手にとって、同級生らとのコミュニケーションが困難になっていることに心を痛めていた。障がい者としての道を歩むことが将来にもつながると両親は考え、伊藤選手は中学卒業後、特別支援学校に進学する。楽しそうに学校生活を送る伊藤選手を見て、両親も安堵している。

地域社会とスポーツ： 母親がマネージャー役に

「養護学校は卓球部なくて」「中三の秋ぐらいからNジュニアスクールに入れて頂きました」「私が仕事終わり次第、練習見たり、迎えに行く。」「どこかに所属してるわけじゃないから、試合は自分で見つけなきゃいけなくなった」「娘の場合は試合の数をこなして、実践練習とかかなり大事だと思ったんです。」「チームにも入れてもらったり、

ネットを使って試合を探したりとか、
というのがマネージャー的な最初で

す。そう、高校生になってから。」

特別支援学校は部活動が盛んではなく、伊藤選手が卓球を続けるためには自分で地域のクラブチームや大会を探して参加する必要があった。誰にも頼るわけにもいかず、卓球とは無縁だった母親自ら、伊藤選手のために、卓球チームに所属させたり、ネットで大会を探して参加登録を行ったり、卓球スクールに通わせたり、娘である伊藤選手の卓球活動を計画し、管理するようになっていく。

社会人として：

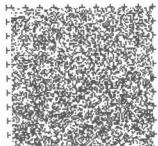
卓球を通じて就職

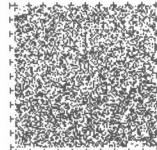
「卓球コーチの個人レッスンも受けてたので。それで（会社との）間に入ってもらって」「娘の個人面接もあり、私も加わっての面接もあったと思います。」「会社としても障がい者雇用は、娘が初めてです。」「大会でお休みをいただくことが多いなると思うんですって言ったら、欠勤にならないように処理しますから大丈夫ですって」

卓球コーチの紹介で、伊藤選手のスポーツ活動に理解のある会社に就職する。障がい者雇用は、その会社にとっても初めてのケースだった。伊藤選手は、その後、知的障がい者卓球の関係者を通じて、障がい者を多く雇用している会社に再就職し、現在も仕事をしながら、卓球活動を応援してもらっている。パラアスリートにもスポーツを通じた就職という道が開きつつある。

パラアスリートとして： 親子で二人三脚

「2009年から2015年ぐらいまでは、年間100以上の大会に出していました。」「私は2011年の三月末で





退職したんです。辞めた理由は社員と娘のサポートとの二足のわらじが、さすがにきつくなってきた。」「助成金をいただいて、すべての報告書、計画書とかも書いてます。」「スコアは全試合つけてます。見てて気になるところはメモして、動画とってコーチに送ります。」

本格的にパラアスリートとしての道を歩みだした伊藤選手をサポートするために、母親は、会社を辞職することを決意する。伊藤選手の選手生活全般に関するマネージメントを行ない、すべての国際大会に同伴し、今では、卓球の技術面に関しても気づいたことは必ずメモや動画で記録して、コーチに伝達して技術向上につなげている。

今後のキャリア：

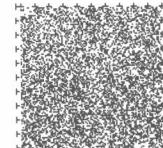
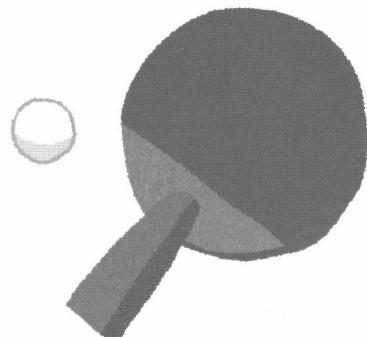
スポーツにおける共生社会の体现

「パーソナルトレーニング週一回受けて、整体とあと練習。時間的にも金銭的にも保てれば、2024年パリ大会も目指せるのかな。」「強化指定選手からはずれて国際大会とかがなくなった時は、それは受け止めて。」「日頃、健常者の試合いでているので、今まで通り卓球の練習は続ける。健常者の世界だと、娘はまだ若手の方だから。新体連の全国大会とか。全日本マスターズ予選や東京選手権の予選にもチャレンジして、いつか本選に出れたらいいなって。世界ベテランにも行くかもしれない。」

親子で東京パラリンピックの次は2024年のパリ大会を目標に定めている。すでに20年以上もトップレベルのパラ卓球選手として活躍してきた伊藤選手のセカンドキャリアについて、母親は、全日本マスターズや世界ベテラン大会など健常者の年代別卓球の世界に移行することを想定している。

共生社会に向けて

健常者のトップアスリートは、選手歴のある父親や母親のコーチングを受けて育っているケースが多い。卓球競技においても、福原愛、水谷準、張本智和、伊藤美誠選手など親をコーチとして幼少期から厳しいトレーニングを積んだ選手がトップを占めている。パラアスリートの場合は、親がその競技の選手歴を持つケースはほとんど見られない。その競技に関する知識のない両親が、障がいを持つ子どもを受け入れられるコーチを探し、練習する機会をつくるだけでも並々ならぬ時間と労力、そしてお金が必要となる。知的障がい者卓球日本一に10回輝き、東京パラリンピックで銅メダルを獲得した伊藤楨紀選手のパラ卓球人生は、母親の献身的なサポートとプロ顔負けのマネージメント力によって生まれ、支えられたものである。東京パラリンピックのレガシーとして、パラスポーツの魅力を伝え、バリアのない共生社会を目指すことが謳われている。知的障がい者卓球のパイオニアである伊藤さん親子が、今後の人生において目指す地平には、障がい者が健常者と共生する卓球の世界がある。そして、その道は、生涯卓球(スポーツ)へつながっている。



2022年
第292号

戸山サンライズ

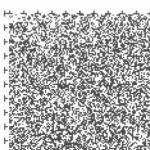


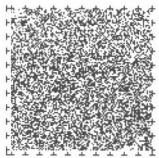
スポーツ

障がい者とスポーツ

特集 パラスポーツを支える

全国障害者総合福祉センター





←これは、SPコードです。
専用読み取り装置の使用により、誌面の内容の音声出力
が可能です。

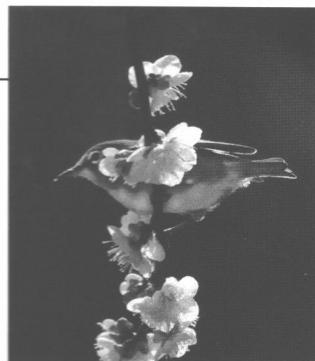
第36回障害者による書道・写真全国コンテスト

写真部門 金賞 「春告鳥」

広島市 小西 由美

(寸評)

花にとまつたメジロを見事に捉え、背景を黒くしたこと
で美しく素敵な作品になりました。



このコンテストは、障害者の文化活動等の推進を図ることで技術の向上、自立への促進並びに積極的な社会参加を目的として、(公財)日本障害者リハビリテーション協会(全国障害者総合福祉センター)の主催により毎年開催されているものです。第36を迎えた今回のコンテストでも、全国各地より191点(写真部門)にのぼる素晴らしい作品が寄せられました。

目 次

2022年第292号

■特集：パラスポーツを支える

共に戦う～6人のメダリスト～ 村上 光輝 1

2020東京パラリンピック
学生ボランティアの活躍 阿部 喜史・河合 菜美花・飯田 千陽 5

■スポーツ：障がい者とスポーツ

知的障がい者と卓球
～親子で拓いたパラリンピックの道～ 田中 敏裕 8

視覚障がい者とゴールボール
～社会参加とその道程～ 江黒 直樹 12

■お知らせ：リハ協ストア

